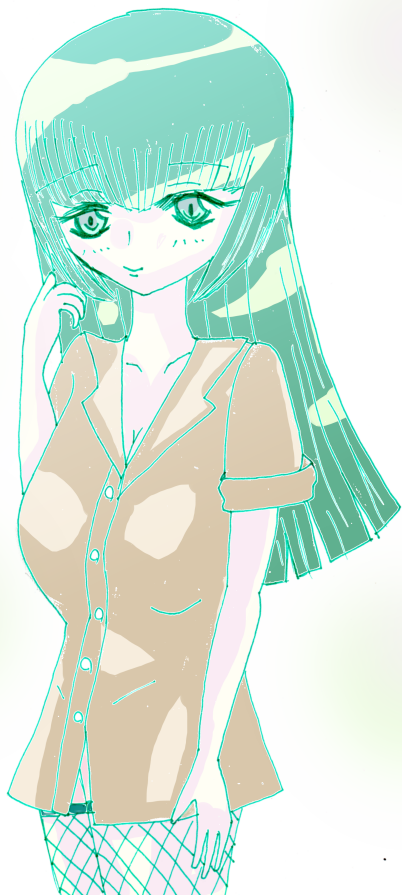


美人妻浮気日記



美人妻浮気日記体験版

白石華

小説屋白石華

表紙・挿絵 白石華

目次

美人妻浮氣日記

7

美人妻浮気日記

「あつ、はつ、あああんっ！いいつ、いいのおつ。」

「良いのかよ？旦那さんがいるのに、こんなに俺にヨガっちゃつて。」

「あつ、くつ、ひいゝつ、んつ。」

「はあつ、だつて今の私は貴方とセックスをしているのよ。」

「メイクラブにはならないの？」

「ならないから貴方と関係をしているんじゃない。」

「初対面で会ったばかりの、これっきりでもう会うことがない貴方と。」

「分かっているても人妻とえっちをする時は聞いてみたいんだ。嘘でもいいから言つてよ。」

「嘘でいいなら言つてもいいけど、それで貴方とは終わり。」

「まだ出してないんでしょ？この体勢だと、貴方だけでいくの、疲れるわよ。」

女が男を見下ろして試すように笑う。ここはとあるラブホテルの一室。ベッドの上で男が寝て、腰の上に女が跨り、自ら腰を振って男のものを扱っていた。

「あはは。コレだから人妻がいいんだ。後腐れ無くて、えっちにはノリノリでいてくれて。じゃあ、乗ってきたところで続けるか、よつ。」

女の言葉で男が愉しそうに両手で女の太股を掴むと、奥の方へグリグリと数回擦って狙いを定め、振動のみが行くように軽く叩き付けるようにではあるが、深く突き込む。

「んううつ。く、ふうう……ん、あ……っ。私、いく、いくの……っ。
ううう……はああ……っ。」

女が陶醉した表情で喉を反ると長い髪が跳ね、下腹部を揺らし腰をガクガクと痙攣させる。

「俺もいきそうなんだけどさ、場所、どこがいい？ 中？ 外？」

「ゴムをしているんだから関係ないでしょ？」

外だったら顔とあそこ以外の場所になら掛けて良いわよ。」

「んー、じゃあ外で。腰浮かして。」

「いいわ。ん……。」

女が腰を浮かすと男は両手を離し、ぶるんとコンドームに覆われた肉竿が飛び出る。膨張したそれはヒクヒクと痙攣している。

「じゃあ、掛けて。私の身体に……。」

女は男の肉竿から離れて腰を下ろすと、そこを眺めながらコンドームを抜き取った。

「んっ、くっ、おお……おっ。」

ビュクッ、ビュクッ、ビュルルッ。

「ん……んっ、んん……。」

男は女の健康的に見える小麦色の腹部から乳房にかけて吐精する。噴水となってしぶいた樹液が飛び散り、当たった物はゆるゆると垂れていく。汗と蜜と樹液の混ざり合った淫臭が辺りに漂っていた。

「はあ、ふうう……ふいいうっ。出した出した。」

「ふふふ。おじさんみたいな声。私、シャワー浴びてくるわね。」

「えゝ。浴びようよ、二人で。」

「いや。折角洗うのに。また貴方の匂いが付いちやう。

自分の家でも使っている石鹸とシャンプー、持ってきているの。

他の匂いを付けたくないわ。」

「手慣れてらっしゃる。」

「浮気を隠し通すことが出来ない人間にはなりたくないのよ。

でなきゃ浮気をする資格なんて無い。バレたら全部、終わりになっちゃう。」

女は言うやヒラリとベッドから降り、ガラスで仕切られたバスルームへと向かう。シャワーを念入りに浴びて身体に付いた何もかもを洗い落としているようだ。

「おお……こちらからは丸見えというのを意識しているのか何と優雅な浴び方。

女優みたいだ。」

男は寝返りを打ち、うつ伏せになると何をするでもなく首を捻って女がシャワーを浴びているのを鑑賞していた。行為は終わり、自分も洗ったら後は着替えて帰るのみ。

「しつこくしまあ、人妻っていいな。その辺にいる女とやるよりずっといい。」

男はシャワーシーンを見続けつつ、さっきまでの行為を反芻しながらニヤニヤと含み笑いをしている。男は人妻を専門にナンパしている男であった。

「今日の人妻もアタリだったな。実にエロかった。それでいて大人っぽくて。キャリアアウーマンぽかったのも良い。」

懐の深さがあって、人付き合いもよくて、女を感じて、男を知っていて、切れ目に後腐れがない。男は最初、誰彼構わずだったが、人妻を経験したらそちらに傾倒していった。遊ぶのにお互いが丁度よい存在だったのだ。

「遊んでいる様に見える人妻が気さくで付き合い易かったり。

貞淑に見えていそうな人妻が女を持て余していて、吐け口に俺を求めてきたり。いやあ、人生経験も豊富だから話していて面白いんだよね。」

男はナンパを通して女と触れ合うことで、性欲を満たすことは勿論だが、他人の人生を垣間

見るのが趣味だった。軽い見た目や人当たりに、放っておくとどこまでも喋り続ける軽快なトーク。それを活かして一夜限りの身軽な付き合いを人妻たちとしていたのである。

「それに、旦那持ちの相手とえっちできるのがサイコーだよな。

俺、フリーだから愉しくって。」

男は独り身だったが人妻と関係を持つことで擬似的に所帯になった気分を得られるのと、軽い遊びでも背徳感を得られるアンバランスさを気に入っていた。

「完全に貞淑な人妻とはお付き合いになつたことがないし。

そもそもそんな人はナンパされに來ない。

いやあ、こうなる前に俺の知っていた人妻なんて手の届かない相手か仮面だよな。

俺はその手が届く相手の仮面の奥に隠された本性に興味があるのだ。

人妻なのに、手が届きそうな感じがいいんだよね。」

「何、独り言、喋っているの。終わつたわよ。貴方も入ったら？」

女がバスタオルを身体に巻いて再び男の前に戻る。

「もう終わり？もつと見たかったのに。」

「ホテルなんだから時間があるでしょ。時間は有効に使う物。」

「はあーい。行つてきます。」

女の、きびきびした言い方に嬉しそうな返事を見ると男もシャワーを浴びに向かつていった。

・
・
・
・
・
・

「はー、今日もいい汗かいたつと。」

それから数十分後、女と別れた男は鼻歌でも歌いそうなほど上機嫌で街を歩いていた。場所とはある繁華街。ナンパ待ちとナンパ師の溜まり場であるナンパスポットとしても有名な場所
で、男はもう誘う気もないのに好奇心からぶらついていたのだった。

「あら、あらら？」

歩いている内に女性の人影を発見する。夜目でも分かるほど目立つ背格好。背筋の通ってスラリとした立ち姿に背中まである長い黒髪。膝上ぐらいの丈の長さのベージュ色のシャツドレスを身に着けていて、脚は黒の模様が細かい網タイツを穿いている。そしてその下はヒールの高いミュール。胸元が気になるのか、しきりにそこをギュツと握っては離したりしている。

「格好は遊んでいるっぽいけど、振る舞いは素人だな。何だろ？」

男は不思議に思い近づいてみると、きよろきよろと辺りを見回している。足音が近づいてきたと分かったのか、男がジャリツと砂を踏む音でこちらを見る。

「あ、あの……。」

「あ……。」

振り向いたときに男は一瞬、言葉を忘れる。綺麗に切り揃えられた艶やかな黒髪。夜間灯からでも分かる、緑がかった黒い瞳。見ているこちらの体温が下がりそうなほど青白いと思えるぐらい白い肌。服越しに見る肉の付きはそこそこで、しかし乳房や腰回りは質感のある体型をしている。年の頃は三十代前後のようで、どこか愁いを含んでいるようなしっとりとしたたた

ずまいをしている。華やかではないが地味でもなく、身嗜みに気をつけ清潔感があつて、整いきった高嶺の花と言うよりは、どこか親しみのある雰囲気のある大人の女性。

（露出が多いはずの服装も何故かしとやかに見えるし、昭和っぽい人妻オーラが出ている。）

男は感心しながら女性を見てしまっていた。

「すみません、私。」

「はいっ？」

女性の呼びかけで男は我に返る。

「私を……ナンパしてください。男の方にナンパされたいんです、私。」

「はあ？」

女の口を突いて出た言葉は女の雰囲気から、およそ想像も付かない台詞だった。

「あの、ナンパされたいんですか？俺に。」

「はい。どのようにされても。」

「いや、それはマズイでしょ。」

「マズくありません。そうしないと私、困ってしまうんです。人助けだと思って、どうか。」

「はああ？ 全く話が見えない。」

マシンガントークを持ち味にしていた男が二度目の言葉に詰まった瞬間である。

「俺が貴方をナンパするのが貴方を助ける行為で、自由にしちやっっているの？」

「はい。」

「……。」

女のきっぱりした即答に男は頭を抱えて座り込んだ。

「悪いですけど、他の人を当たってください。」

「そんな。頼んだらいつもそう言われて逃げられて。」

「それはあなたから感じたこと、そのままの対応をしたんだと思います。だから俺も。」

「待ってください。お願いします、私をナンパしてください。」

立ち上がって去ろうとした男を女が裾を引っ張って留める。女が男を引き留めようとしている構図は場所がナンパスポットだったため特に目立たず、ポツポツとした数の通行人が素通りしていた。

「せめて理由を。」

「何も言わずに私を。」

「じゃあ、無理。美人局でも、もっと良い理由を作るよ。怪しいのは俺、駄目。」
「あつ。」

男が女の手を振り払うとサツと手を挙げる。

「じゃ、そゆことで。」

「そんな……今日も無理だったなんて。どうしよう、私、あの人に。」

「あの人？」

人妻専門ナンパ師の男がつい反応してしまう。

「あの人って……旦那さんか彼氏？」

「夫です。」

「つまり、ナンパされるのは夫公認で、そうしないと何かさせられるとかそっち系？」

「いいえ。何も……無いんです。」

「んんん？」

「ここでは何ですから話、場所を変えて聞いていただいていいですか？」

男は考える。相手は人妻と確定した。何やら秘密を持っているだけで悪い人ではなさそうだった。好奇心からそれを伺うだけなら良いかもしれないと男は考えた。そして理由さえ分かれば、あわよくば性交渉に持ち込むことだって出来るのだ。合意で。

「ああ……いいですよ。サ店かどこかで。」

「お願いします。」

結局、誘惑に負けた男は繁華街からひとまず喫茶店に移動した。

.....

「旦那さんが奥さんのセックス報告を聞かないと勃たない人？」

チェーン店のため、喫茶店だというのに流れてくるのはロックなりヒップホップなりのテレビでもよく流れるJ-POPと急ぐしらえで作られたような内装。出てくる食器も店規格で作られたコストカットの跡が残る物。そこで飲み物だけはインスタントの気配はあるが飲めなくもないという、ある意味、統一感のある店構えの中で男と女は話をしている。席を外す様子もないしこちらに飲み物を勧める様子もない。この時点ではぶつくりの可能性はないと男は女を値踏みしていた。

「声を出さないでください。」

「ああ、すみません。」

男は声の大きさを落とす。

「でもまた、何でそんな難儀な性癖を旦那さんは。」

「最初はあの人だつて普通だったんです。」

でも、仕事が忙しくなる内に会える時間が減つていつて。

次第にあの人と過ごす時間も減つていきました。」

「ふんふん。」

「その内に私、寂しくなつて。」

よく家に来てくれた、あの人部下だった男性に話し相手になつて貰うようになって。」

「それで、浮気しちやつたと?」

「それが……あの人部下の方に頼んで、そうさせたと後で教えられたんです。」

私を寂しくさせないようにと。」

「はあ。」

「あの人とその……するときに。どんなことをしたのか私に言わせようとするんです。」

そうするとあの人、どんどん。」

「ああ。もういいです。」

大らかな人なのか業が深いのか分からない人ですね。」

「はい。それさえなければとても家族思いのいい人なんですが。」

「俺だつて人へ言えるほど立派な趣味じゃない。とやかく言う気はないです。」

「だったら部下の人と関係が続けていればいいじゃないですか。何で行きずりの俺に。」

「部下の方がご結婚されたんです。それで、新しい人を見つけるようにと。」

「だから、こんなナンパしてくださいって格好で街をうろついていたの？」

「はい。お恥ずかしい話ですが。でも誰にも相手にされなくて。」

「ナンパ慣れしてなさそうな人だと、逆に相手にしづらいですからね。」

「どんな厄介事が待っているか分からない。お互い愉しくヤレないと。」

「そうなんですか。」

「そうなんです。」

「それで、あの。私と、その……浮気していただけるんでしょうか？」

女は男の顔をじっと見る。蛍光灯の明るい光の元でも女はやはり美しかった。髪の毛も、瞳の色も緑がかった黒で。放っておいたら、いつか他の男が女と関係を持つようになるかもしれない。

話のことが本当なら人妻で、しかし男遊びも知っていて、旦那公認の浮気だから厄介になる可能性はない。

「俺、付き合いは人妻とだけで一夜限りと決めているんです。」

お互い深入りせず後腐れ無く愉しめるように。」

「はい。」

「でも、奥さんは俺とやった後も他の男の人と浮気をされるんですね？」

「はい。」

「旦那さんの趣味だから心変わりでもしない限り、ずっとそうなる。」

「そう、なります。」

「旦那さんが誰彼構わず男性と付き合う報告を聞くのが好きなら俺はそれでいいです。」

「いえ……。そうは、聞いてないです。」

「俺と軽い付き合いが旦那さん公認でずっと出来る。うん、俺にはうますぎる話だけど。」

男は目を伏せて軽く考える。どうしてだろうか。ここまで話を聞いてしまったら女の話に付き合ってもいい気になっていた。

「よし、良いですよ。でも。」

「はい、言ってください。」

「試しに俺とえっちしてみて、俺と合うかどうか試してみてで。」

それから続けるかどうか決めましょ。」

「分かりました。」

男はここでもう一つ、気になることがあつたが聞かなかつた。「旦那以外の男とセックスをするのが貴方は厭じやないんですか？」ということだが、それは愚問だろうと思ひ聞かなかつた。女はこうして自分を求めているのにわざわざ口で聞くことではないだろう。

それに、それを聞いたら軽い付き合いが出来なくなる。女に深入りする気もないのに夫婦の性交渉をする時の趣味にまで口を挟む気はなかつたのだ。

（貞淑な人妻が性欲を持て余していて、はけ口に俺を求めてきたことだつてあつたし。）
（今更どうこう言つたつて。）

男は頼んでいたコーヒーを飲み干す。

・
・
・
・
・

「場所、どこが良い？ホテル？公園？俺の部屋？」

喫茶店から出ると、男は女の肩を馴れ馴れしく抱き、直接的な言葉をわざと投げかける。女の反応を見ようとしたからだ。

「あつ、あの。貴方の部屋で。」

女は肩を震わせたきり振り払おうとせず男のさせるままにしている。

「ホテルじゃなくて良いの？」

「はい……前に浮気していたときは、その場所があの人、一番反応がよかったから。」

「ふーん。浮気相手の部屋にも行ったことあるんだ。」

「……ありました。」

女は男から目を逸らし声を震わせながら俯いてしまう。

（ふんふん。確かにこれはくるものがあるな。）

（旦那さんが奥さんにセックス報告をさせたがる理由が分かるわ俺。）

男はいつの間にか女の亭主へ趣味の共感を覚えていた。

「俺の部屋、マンションで独り暮らしなもんだから気にしなくて良いよ。歩いてすぐだし。」
「はい……。」

女は男に肩を抱かれたまま、マンションまで付いていった。

「そんなに綺麗な部屋じゃないけど、まあ座って。」
「お邪魔します。」

部屋にたどり着くと男は女を中に入れ、自分は部屋の電気を付けた。パツと明かりが付くと部屋の中が見渡せるようになる。

「片付けられて、いるんですね。男の人の部屋なのに。」

「うん。人を部屋に招くようになると自然と片付けるようになるよ。」

「くすつ。答え方が主婦の方みたい。」

「それに、片付けてくれる人もたまにいるし。綺麗な部屋じゃないと落ち着かないって。」

「はあ。」

「で、どうするの？ ホテルじゃないから時間は気にしなくて良いけど。

このまま話しながらえっちする？ 一気にやっちゃう？」

「今日は相性を見るためなんですよね。」

「うん。」

「なら、すぐをお願いします。」

「オーケー。」

「前もって聞いておくけど、ゴムは付ける派、付けない派？俺、準備しなきゃ。」

女をベッドの中央に座らせると、男は立ち上がって女を見下ろしダンスに目を向ける。

「ピルを飲んでいますから、無くても。」

「うんうん。俺も生は好きだから良い心がけだと思う。それと。」

「何ですか？」

「えっちするときは名前で呼び合った方がいい？」

「だったら俺、ショータって名前があるんだけど。」

「名前は有った方が。」

「じゃあ、名前を教えて。どうせ偽名で良いよ。なんつーの、こういうの。リングネーム？」

「くすつ、ゆ……マナミで。」

「りようかい。マナミさん、俺のことはショータって呼んで。でさあ。」

ここで便宜上付けた名前でお互い呼び合うことになる。ショータはしゃがむとマナミの顔に唇を近づける。

「キスとかして旦那さんは平気？」

「あ、あの……。」

女は言葉を詰まらせると困ったようになる。

「うん。旦那さんは平気でもマナミさんは厭ならいいよ。俺、しないから。」

「すみません。」

「いいよ、俺、人妻専門のナンパしてるって言ったでしょ？」

必ず浮気になるからそういうのは前もって知りたくて聞いただけ。

ベッドに寝て貰って良い？」

「分かりました。」

ショータはマナミの肩に手を掛け、枕を背にして後ろに倒すと自分はのしかかる。とき、と軽く布団に身体が当たって沈むと首筋に舌を這わせ唇を付ける。付けるのみでキスマークは付けない。人妻とするときに身についたショータの癖だった。

「う、うう……あつ。」

マナミは身を震わせて反応を返していた。

（反応が初心な生娘みたいだがここにいるのは大人の人妻なんだよな。）
（しかも浮気もしている。）

マナミから聞いたマナミの経験とマナミの外見。それとはアンバランスなものを感じる。

「初めて会ったばかりの、しかも行きずりの相手とだから固くなるのはしょうがないけど。俺は遠慮しないよ。」

ちろちろと鎖骨を舐めながら服越してからマナミの乳房に手を触れる。

「あ、ああ……あつ。」

「んゝ反応が気持ちいいのか緊張しているから反応が大きいのか分からない。」

肉の詰まった感触から、マナミはサイズがピッタリのブラジャーをしているようだ、シヨ

ータはマナミの乳房を堪能していた。

「この調子だと、俺ばかり気持ちいい展開になっちゃうか。」

シャツドレスのボタンを外して、胸の谷間を鑑賞する。更にその先の下着へ……。

「おお。流石、黒の網タイツを穿いているだけあって下着はベージュと黒のレースか。」

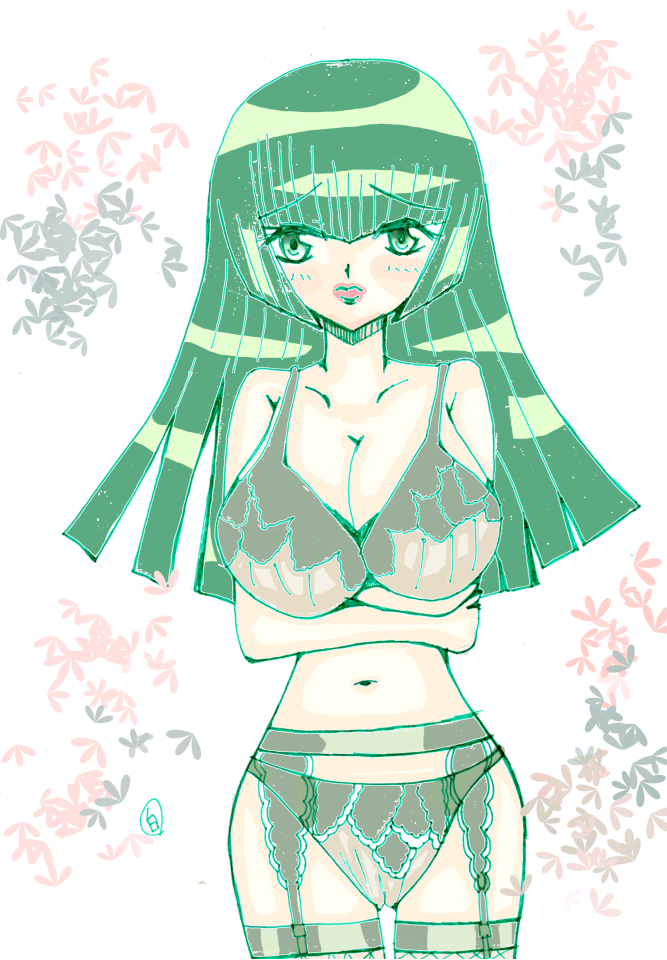
「や、ああ……。」

下着に包まれた乳房を見られただけでマナミは顔を真っ赤に染め、手で覆い隠してしまう。しかしショータは躊躇わずボタンを外し、柔らかそうな腹部、臍、そして下腹部へと露わにしていた。

「ガーターもお揃いでベージュに黒レース。ショーツは……勿論ベージュに黒レース。」

ショータはマナミの下着を全て見えるようにした。

「皺になるし汚れたらマナミさんが困るだろうから、上着は取っちゃおう。」



身体、浮かせて。」

「あつ、うう……。」

返事も聞かず姿勢を変えさせシャツドレスも脱ぎ取ってしまう。あつという間の早業だった。

「うん……。人妻には下着姿がよく似合う。」

顔を見たときに感じた青白いと思えるほどの白い肌は化粧に寄るものだけではなく、全身がそうだった。肌色に近いはずのページュは濃く感じ、黒のレースが素肌の白さを際立たせている。

ブラジャーには肉が詰まり、大きすぎるとは言えないが、豊かであると言えるだろう。パンティは腰回りに大きなレースが巻かれ、その下の秘部を覆う生地面積が薄い。それが肉付きの良い腰回りを強調して見せている。ガーターベルトの下は黒の網タイツが繋がっていて、質感のある見た目である。ショータもこの時ばかりは時間を掛けて目に焼き付けようとする。

「ショータさんは。この方が良いんですか？ 私の方が格好。」

「派手でも清楚でもどっちでも良いよ。下着姿を鑑賞したくなるのは性だね。」

旦那さんはどっちが好きなの？」

「男の人を目でも楽しませられる格好をしろと。」

「相手の男のために着させるのか。それはまた。」

シヨータは会ったことがないマナミの亭主の趣味の徹底さに畏怖のような物を感じていた。

「ブラジャーは取っちゃつて。」

「うう……。」

背中に手を回し、ホックを外すと弾むように乳房が揺れて広がり、先端にある乳輪と乳首が露わになる。色は赤茶がかってやや大きめだが、それが卑猥に見えた。生娘のような反応の、大人の身体的女性。

「思わず触りたくなる。」

シヨータはマナミの鎖骨に人差し指で触れ、下になぞっていく乳房や乳輪、乳首、更にその

下へとつつつと線を描く。暖かくしつとりと濡れ、吸い付くような柔らかな肌。乳房の頂きは軽く触れただけでもう充血して勃起を見せる。

「はあつ、ん、んううつ。あつ。」

マナミは身を振り、その拍子に乳房がぶるんと揺れる。

「おっぱいの感度は良いみたいだね。」

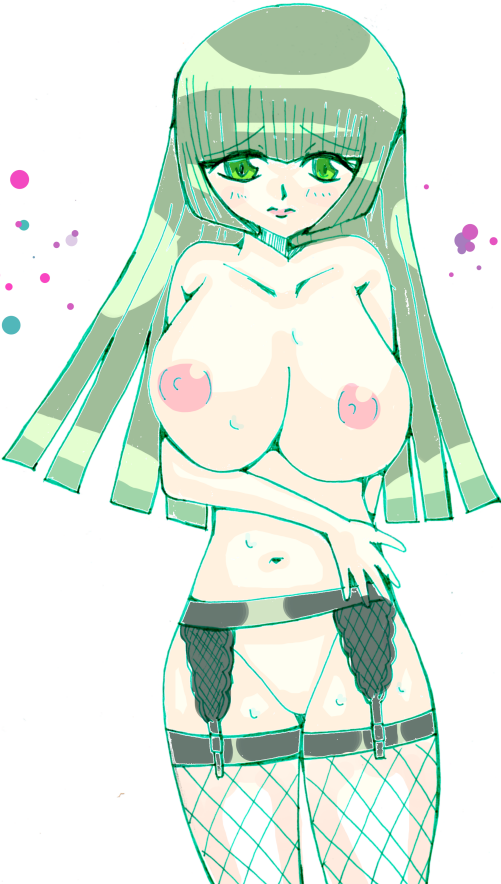
シヨータは品定めでもするように女の身体に触れていく。両の乳房の下部に手を掬い上げるように添えると、人差し指はその中央へ。揉み解しながら愛撫をする。

「あつ、あつ。いや、らしい触り方……うんんつ。」

「傷つくなーその言い方。誘ったのは奥さんからじゃないか。」

シヨータは乳房を強く掴み、親指も伸ばして乳首をくにと軽く抓る。

「あつ、あつ。だつて。こんな事……。」「



「おっぱい触られた程度でこの反応って。」

「だって。あの人にも、前の相手にも。」

「俺みたいなことはされなかったって？」

「……はい。」

（……初心な反応、セックスには生娘みたいな知識しかない。）

（旦那と前の浮気相手には変なことはされなかった……。）

（つつても俺のすることがそこまでおかしいとは思ってないけど。）

シヨータはマナミの亭主に畏怖を感じていたが、マナミを見ている内に段々、ズレを感じるようになり、ふとあることが思いつく。

「ん、くっ。うんん……。」

先端のくびれを掴むとマナミの花弁に宛がい、数回押し付けて鳥羽口を広げようとする。初めて相手の、亭主がいる人妻とこうするのは女の立てた操に踏み込むのを実感できるため処女喪失にも似た感動を覚えていた。シヨータにとっては処女喪失よりもだが。シヨータはその瞬間を長く愉しもうとする。

「あっ、ああっ。んっ、んふ……っ。」

散々刺激された肉芽に擦れる度にマナミは甘い息を漏らす。

ぬるっ、ぬううう……っ。

「う、はあっ。あ、あ……っシヨータ、さん。」

息を吐いた拍子に先端がめり込むと、温かな潤みの壺に入っていた。きつすぎず、緩すぎず、適度に締めりがやってくる。それでいて肉はぶちゅぶちゅと絡むように食いついてきて柔

らかい。長く行為を愉しむなら最高の淫花だろう。自分は脚を広げて正座し、少し腰を浮かせてマナミの腰を掲げ持ち引き寄せる。

ずっ、ずっ、ずっ……。

「んっ、んっ。おっ、おお、……うう、ふっ。あの、さ。マナミさんの中。」

「はい。」

「柔らかくて、温かくて、ふかふかしているから。」

「耐久力が付けば旦那さんとずっとセックスできると思う。」

「あ、ああ……はい。」

顔を赤らめ、少し嬉しそうになったのか恥ずかしいのか。ショータから目を逸らして俯く。

（……うん。これは責任重大だな。）

（いいものが見られる分、俺はしっかりマナミさんを調べないと。）

ゆっくりと入れ、また引き抜く。ぬめりを持ち滑りがよくなった柔肉とザラザラした肉の粒

に挟まれ擦られ中の感触を味わいながら、もう興奮しているのにもかかわらず次第に快楽を引き出していくやり方は、シヨータの性欲を屈折した形で溜め込んでいった。

「あ、はああ……ああ、あつ。はあつ、はあつ、はああ……つ。」

マナミは自分がどこまで出来るのか教えて欲しい、とセックスを頼んできた。ならばセックスの目標はマナミを開発することだろうと考える。シヨータの何もかもを出して一気に味わい尽くすことは、それはそれで自分も愉しめるだろうが、体質的にそういう行為には向いていなければ旦那とマナミに与えることは出来ないだろう。段階を踏んで次への準備をし行為の段階を上げていき、限界まで至ることがマナミに自身の身体の具合を教えることだと判断したからだった。

「はあつ。ああ……あふつ、あつあつ、ああ、うう……んうつ。」

内側から腹部を揺さぶられ続ける行為にマナミはうつとりと気持ちよさそうに顔を緩ませる。

「うん、マナミさん、いい顔してる。まずはこれで、いくまででしょうか。」

入り口から奥まで、解れた肉の表面を優しくなぞるようにショータは往復する。見られるのは顔だけでなく、腰がぶつかりと乳房もぶるん、と揺れて。

（スタートだから、刺激は複雑じゃない方が良いよな。）

ショータは眺めて高めるのみにし、触れるのは後回しにする。

「あ、ん。や。顔……言わない、で。はああ……ああ、んうっ。」

「俺にだつてご褒美が欲しい。マナミさんの顔、今、俺が感じさせてるんだ。」

「ああ……だつてこんな、の……あつ。あつ。」

さつきまで緩んでいた顔はそのままに、腰が痙攣を始める。

「いきそうだったら我慢しなくて良いよ。」

気持ちよくなるよう刺激を感じることに集中してあげて。」

「は、はい……あ、ああ……っ。」

マナミが背筋を反らし腰を震わせる。

「俺はどこを擦った方が良い？入り口？奥？」

「や、ふあ、あああ……っ。あの。」

「はい。」

「入り口を、お願いします……。」

「分かった。」

マナミの太股を掴むと前屈みになり、小刻みに腰を揺らし、花口に刺激が来るようにする。

「あ、あああ、あっ。い、くっ。いくっ。私……いく。はああんっ。」

顔をしかめマナミの腰から背筋にかけて揺れると、全身が震えこわばってゆく。

「んっ、っっ、ふうう……うっ。俺も……いく。」

ドプンツ。ドクツドクツドツ。ドクドクツ、ドクツ……ドクツ。

出し入れの刺激が限界になったシヨータも高まりを白濁液に変えて流し込んでいく。

「あ、はあああつ。あつ、あつ。んん……ふつ。」

「んん……つ。マナミさんの中でいくの、いいな。柔らかくシツカリ受け止めてくれて。」

「ああ、お腹……こんなに、いっぱい。溢れて……つ。」

シヨータの吐精を溢れかえるほど中で受け、マナミは蕩けるような表情でいた。

美人妻浮気日記体験版

2020年 1月19日 初版

奥 付

発行 小説屋白石華

著者 白石華

イラスト 白石華

本書の無断複製、複写、転載を禁止します。

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

(<http://tokimi.sylphid.jp/>)